原 明美（音楽評論家）
Akemi Hara

モーツァルト：ロンド イ短調 K.511

音楽史上で傑出した天才だったヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）は、ソナタや変奏曲のほかに、ロンド、メヌエット、幻想曲などの小品も、ピアノのために残した。ロンドK.511は、そのなかでも特に珠玉の名作の誉れ高い1曲である。1787年3月11日にウィーンで完成されたが、曲の書かれた背景に、当時あいついだ友人の死や、父の死病（父レオポルト・モーツァルトは同年5月28日没）があった、とする説もある。モーツァルトの数少ない短調の作品が、どれも悲しい出来事に関連しているというわけではないが、曲中に散見される半音階的な動きの演奏効果とあいまって、悲しみの極致を表すかのような曲趣が、このロンドには漂う。曲は、アンダンテにより、2つのエピソードを伴う明瞭なロンド形式で書かれている。イ短調のロンド主題は、シチリアーノ風のリズムによりつつ、哀愁の情に満ちあふれている。そして、この主題にはさまれた2つのエピソードは、それぞれヘ長調とイ長調で書かれており、希望の光のような明るさを差しこむ。

モーツァルト：ピアノ・ソナタ 第8番 イ短調 K.310／K.300d

モーツァルトの残した約19曲のピアノ・ソナタは、大半が長調だが、K.310（ケッヘルによる作品目録の第6版ではK.300d）は、彼が初めて短調で書いたピアノ・ソナタであり、パリ滞在中の1778年に作曲された。その滞在中に母を失ったモーツァルトは、同じころにホ短調のヴァイオリン・ソナタ（K.304）も作曲している。短調によるこの2つの作品には共通して、当時の彼の悲しみや苦悩が刻まれていると考えられよう。曲は、3つの楽章から成る。

第1楽章：アレグロ・マエストーソ。イ短調、ソナタ形式。主題の付点リズムが、独特の重圧感や緊張感をかもし出し、その気分は楽章全体を支配している。

第2楽章：アンダンテ・カンタービレ・コン・エスプレッショーネ。ヘ長調、ソナタ形式。内に秘めた感情が滲み出たような楽想を持ち、展開部では劇的な高まりも見せる。

第3楽章：プレスト。イ短調、ロンド形式。切迫した雰囲気を持つロンド主題を中心に展開する。簡潔な書法で進むなかに、情熱の発露も感じられる。

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ 第28番 イ長調 Op.101

古典派の大作曲家ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）のピアノ曲のなかで、作品番号のついたソナタについては32曲が残されている。初期・中期と、独自の作風を展開させつつ、ピアノ・ソナタの様式の転換を図ったベートーヴェンは、第28番を含む後期の作品において、さらに創意に満ちた工夫を凝らす。その作品は従来のソナタの形式の枠を超えて、即興性さえ帯びている。第28番は、彼の後期ピアノ・ソナタの、いわば入口に位置する。曲想がロマンティックかつ幻想的であること、そして、第1楽章の第1主題が終楽章でも重要な役割を担うという、循環形式の手法は、ロマン派への近づきを示す特色に他ならない。1816年に完成されたこのソナタは、ドロテア・エルトマン夫人に献呈された。彼女はベートーヴェンの弟子であり、ピアニストとしては優秀だったという。曲は、3つの楽章から成る。

第1楽章：アレグレット・マ・ノン・トロッポ、「いくぶん快活に、心からの感情をもって」。イ長調、ソナタ形式。無駄のない簡潔な構成をとるなかに、歌謡的な美しさの漂う主題が印象深く響く。

第2楽章：ヴィヴァーチェ・アラ・マルチャ、「生き生きと、行進曲風に」。ヘ長調、3部形式。勇壮さと繊細さが綾を成し、幻想風の性格が色濃く表れた楽章。なお中間部は、変ロ長調でカノン風に現れる。

第3楽章：序奏（アダージョ・マ・ノン・トロッポ・コン・アフェット、「ゆっくりと、憧れに満ちて」、イ短調）～主部（アレグロ、「速すぎず、決然と」、イ長調）。情感豊かな序奏の後、第1楽章の第1主題を回想する経過部を経て、ソナタ形式の主部に入る。そして、展開部にフーガを含む充実した構成により、華麗なフィナーレを築く。

シューマン：ピアノ・ソナタ 第2番 ト短調 Op.22

ドイツ・ロマン派の作曲家ローベルト・シューマン（1810～56）は、当初はピアニストを目指したが、無理な練習が災いして指を傷めてしまった。しかし、ピアノへの想いを作曲の筆で表すこととして、20歳代の間はピアノ曲の創作に集中的に取り組んだ。ピアノ・ソナタ第2番は、1835年に完成され、初版も出されたが、シューマンは、終楽章を書き直し、1839年に、現在ある形で出版した。この再版のときにOp.22と入れられたため、ソナタ第3番（Op.14）よりも遅い作品番号となっている。

H.フォークト夫人に献呈されたこのソナタは、4つの楽章から成る。

第1楽章：「できるだけ速く」。ト短調、ソナタ形式。シューマン独特の加速性を帯びた拍子感が強く打ち出されながら進む。コーダに入ると、「さらに速く」「もっと速く」との指示がある。

第2楽章：アンダンティーノ。ハ長調、自由な変奏曲形式。自作の歌曲「秋に」の旋律を改作したという主題をもとに、夢幻的な変奏が続く。

第3楽章：スケルツォ、「きわめて速く、そしてはっきりと」。ト短調、3部形式。付点リズムを主体とする元気のよいリズムで進む。中間部も、リズムの面では主部と類似している。

第4楽章：ロンド：プレスト。ト短調、やや変則的なロンド形式。第1楽章における加速性が、さらに激しくなり、また、16分音符の連続により、無窮動的な音楽にもなっている。これと対照的に、ゆったりとした夢見心地の世界を垣間見させる楽想も現れる。そしてコーダに入ると、「プレスティッシモ：カデンツァ風に」と指示され、追い立てられるように加速しながら、全曲を結ぶ。

ショパン：4つのマズルカ Op.24

ポーランド出身のフレデリック・ショパン（1810～49）は、生涯の後半を主にフランスで過ごし、祖国ポーランドに帰ることなく世を去ったが、革命のさなかにあった故国のことを想い続けていた。マズルカやポロネーズなど、ポーランドの舞曲に基づく作品には、彼の郷愁が秘められていると言えよう。

マズルカとは元来、ポーランドのマゾフィア地方に古くから伝わるマズールという踊りに端を発するが、ショパンの作曲した60曲近いマズルカには、故国の舞曲を芸術作品へと高めた様式化の跡がうかがえる。Op.24としてある4曲のマズルカ（第14番～第17番）は、1834年～35年に作曲され、ドゥ・ペルトゥイ伯爵に献呈された。

第14番（ト短調、Op.24-1）は、洗練された味わいを持つが、増2度の進行が独特の彩りを添えている。第15番（ハ長調、Op.24-2）では、中間部で意表をついて変ニ長調となる点が興味深い。第16番（変イ長調、Op.24-3）については、中間部が短いが、全体としては優雅な雰囲気を保っている。第17番（変ロ短調、Op.24-4）は、対位法的な書法も含む充実した構成が目をひくマズルカである。

ショパン：ポロネーズ 第6番 変イ長調「英雄」 Op.53

1842年～43年に作曲され、オーギュスト・レオという人物に献呈されたこの曲は、列をなして堂々と進軍する英雄たちの姿を想像させる曲想から、のちに「英雄ポロネーズ」の名で親しまれるようになり、今日ではショパンの最もポピュラーなポロネーズである。曲は、スケールの大きな序奏に続いて、3部形式で展開し、ポーランドの舞曲ポロネーズ独特の、勇壮な3拍子のリズムに乗って、力強く進んでゆく。